
貴女の幸せ

奈津美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴女の幸せ

【Nコード】

N8177U

【作者名】

奈津美

【あらすじ】

短編 See you tomorrow.の続編です！ 高校1年生の春、光彦の哀への想いが『憧れ』から『恋心』へと変わった。だが、哀の心の中には… 変わりゆく環境、狂いだす歯車、壊れていく心。「僕、貴女のことを…」「私はずっと貴方のことが！」「何かあったら俺に言えよ？」「ねえ、哀ちゃんって新一のこと…」「歩美はずっと光彦君を応援してるよ！」「おめえはそれで良いのかよ！」「切なくて、苦しくて、悲しくて、それでも諦めきれないこの想い。二人の恋の結末は…！？

作者からご挨拶

こんにちは！奈津美です！

えーっと、この話は前から

書こうと思ってましてですねえ

P l e t t e に載せた S e e y o u t o m o r r o w の
続編という形で書かせて頂きます^^*

なので、S e e y o u t o m o r r o w を

短編という形で再投稿させて

頂いたという訳です(´、´、´)

こちらはあくまで不定期連載。

という形にさせて頂きます！

別の連載もありますので…

マイペースに書いていきます

基本光彦の一人称ですが

哀ちゃん一人称の話もちらほら。

三人称は辛いのでね

光哀の作品って少ないんで

ちよっとこの作品をきっかけに

皆様で光哀広めて行きましょって

意を込めて、連載スタートします！

ではでは本編スタートです

彼がいなくなつて、もう何年経つたのだろう。
気がつけば僕達はランドセルを降ろして、
パリパリで少し大きい制服に袖を通し、
持ち慣れないスクールバックを手にしていた。
そして、とうとう少年探偵団も解散。
それぞれ別々の進路を選ぶ中、僕は本当に偶然に
彼女と同じ高校へ行くことになつた…

「あら、同じクラスね」

「は、はい！そうですね！」

「よろしくね、円谷君」

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

16歳の春。

優しく微笑む彼女の笑顔を見たからなのか、
僕の胸からトクン、トクンと優しい鼓動が聞こえる。

僕の彼女への想いが、

憧れから恋心へと変わった瞬間だった……

僕は、小1の頃からずっと灰原さんが好きだった。

けど、それはまだ本物の思いじゃ無かった。

だって僕は歩美ちゃんにも好意を抱いていたから…

「円谷光彦です、帝丹中学から来ました。

先ほどは拙い挨拶ツタナを聞いて下さり、

ありがとうございます。よろしくお願いします」

僕、円谷光彦は帝丹高校へ入学した。

理由は、新一さんが行っていた高校だからである。

少年探偵団は解散したが、僕は今でも一人で

探偵もどきなことをしていた。依頼内容は物探しが主で、
事件現場に行くことは滅多に無いが、それでも良かった。
少しずつで良いから、僕は新一さんに近づきたかった…

「円谷君って一番成績良かったんだって」

「だから入学生代表の挨拶してたんだ〜さすがだね」

「ちょっとカッコいいね！」

ひそひそとクラスのみんなが僕のことを話していた。帝丹中学から帝丹高校へ進学した生徒は多かったが、あいにく僕のクラスには灰原さんしかいなかった。だから、僕はボーっと窓の外を眺めて寂しさを紛らわした。歩美ちゃんは女子校へ、元太君はサッカー部が強い隣町の高校へ進学したため、バラバラになってしまったのだ。

キンコーンカーンコーン

「はい、では今日はここまで」

先生の掛け声と同時にみんな立ち上がり、周りの人々に声をかけていく。いわゆる友達作りというものだ。

「円谷君！1年間よろしくね〜！」

「仲良くしてね〜！」

「は、はい。よろしくお願いします」

僕は正直、こつこつのがあまり得意では無い。

今までは半ば強引だがすぐに人と打ち解ける
ことができる元太君と、誰とでも笑顔で
楽しそうに話すことができる歩美ちゃんがいたから
すぐに新しいクラスでも友達ができたのだ。

「1年間よろしくな」

「勉強教えてくれよな」

「は、はい！よろしくお願ひします！」

高校生ともなると、もうみんな手馴れた様子で
次々とクラスメイトに声をかけていく。
そして、少し席の離れた灰原さんの方を
チラッと見ると…

「灰原さん、よろしくね」

「な、仲良くしような！」

知らない間にクラスの男子ほぼ全員が
灰原さんの机を囲んで自己アピールをしている。
そんな様子を見て、僕の胸はズキンと痛んだ。
灰原さんは美人だから仕方ないんだけど…

「あ、円谷君」

僕が少し肩を落としていた時、
灰原さんは僕に気づいたのか
机の横にかけた鞆を持って、
自分を囲むクラスメイトに
『さようなら』とクールに言って、
僕の元へやって来た。

「一緒に帰らない？」

「え、僕で良いんですか？」

「あなたが良いのよ」

灰原さんはクスツと微笑んで、教室を後にする。
僕は灰原さんの言葉に浮かれていたが、
ハッと我に返って、小走りで先に行ってしまった
灰原さんを追いかけた…

1 (後書き)

はい、始めましたね！
こんばんは！奈津美です！

早速お気に入り登録して
下さった方、ありがとうございます

オリキャラ出てきますが、
ご了承くださいませ)・・・(

みっちゃん(光彦)も哀ちゃんも
いっぱいいっぱい傷つけて
いっぱいいっぱい苦しめて
しますがハッピーエンドに
してみせます！頑張りますね！

次話は未定です…

「助かったわ、私あーゆうの苦手だから」

二人っきりの帰り道。

どうも慣れなくて、ソワソワしてしまう。

けど、バレないように冷静を装って

僕は灰原さんに笑顔を向けた。

「僕も代表の挨拶なんてしたくなかったです。

注目を浴びるのはどうも苦手で、そりゃあ

褒められて悪い気はしませんが…僕はそんなに

凄いい奴じゃないんです。みんなにガツカリされそうです…」

「そんなことないわ、貴方は凄いい人よ」

「え？」

「だって、貴方はずっと私を励ましてくれたじゃない」

「灰原さん…」

小1の頃、彼…江戸川コナン君が僕らの元から去って行った。

歩美ちゃんと元太君は気づいていなかったが、僕はコナン君と新一さんが同一人物だと確信し、灰原さんを問い詰めた。灰原さんはコナン君がいなくなっただけからとても落ち込んでいて、僕は少しでも力になりたくて、確かこんなことを言った。

『灰原さんの居場所はありません！

僕達はずっと灰原さんの仲間です！

だから、だから僕達を避けないで下さい！』

その後、僕は灰原さんが本当は宮野志保という新一さんと同じ年くらいの女性で、黒の組織の一員だったことや、コナン君と同じ薬を飲んで幼児化したことなど、詳しい話を聞かせてもらった。全て話し終わった後、灰原さんは目に涙を溜めながら

『幻滅したわよね…』

と、か細い声でそう言った。

けど、僕は幻滅なんてしなかったしむしろ灰原さんへの想いが強まった。

事実を知った僕が、歩美ちゃんや

元太君以上に灰原さんを支えていくんだと
そう心に決めて、今まで過ごしてきた。

「ありがとうございます」

僕の心は灰原さんでいっぱいになっていった。
けど、灰原さんの心に僕は多分ほんの少ししかない。

「円谷君なら大丈夫、すぐ打ち解けられるわ」

「はいっ！」

何故かって？

「明日一緒に学校行かない？」

「え？良いんですか？」

「もちろんよ」

だって、灰原さんは…

「あ、送ってくれてありがとうね」

「いえいえ」

「じゃあね、また明日」

「また、明日」

僕に笑って手を振った後、いつもチラツと隣の家を見てから家に入る。無意識なのかもしれないけど、僕はいつも灰原さんの笑顔に癒され、けどすぐに胸を痛まされているのだ。

「また、明日…か」

もう、8年も経っているのに彼は灰原さんの中からも、僕の中からも決して消えたりしなくて…むしろどんどん存在が大きくなっていくような気がして、自分は何てちっぽけなんだろうって無償に悔しくなる。

「僕はいつになったら貴方に勝てるんでしょう…」

久しぶりに聞いた無邪気で明るい声に
僕の心は凄く癒された。

『哀ちゃんと同じクラスになれた？』

「はい、なれました！」

『良かったね〜！嬉しいでしょ？』

「はい、他に友達がいないので…」

『え〜！？歩美はもう友達できたよっ』

さすがだなあ…

高校でも歩美ちゃんは歩美ちゃんのまま。

『ねえ、光彦君』

「はい？」

『光彦君は…哀ちゃんの…』

「え？」

『う、ううん！何でもない！何かあったらまた電話するね！』

「はい、それじゃあまた」

『うん、またね!』

ピッ

僕は歩美ちゃんと言葉の続きが気になった。

もしかしたら灰原さんからコナン君のこと？

もう高校生になった訳だし話しててもおかしくは無い…

歩美ちゃんは受け止められているだろうか？

ずっとずっとコナン君を想い続けていた歩美ちゃんは

灰原さんを恨んだりしないだろうか、と僕は心配だった。

けど、歩美ちゃんともう一回電話をしてその話を聞く勇気が僕には無かった。

「疲れた…」

僕はベッドに飛び込んで、そのまま眠りについた。

ピンポンッ

ほぼ毎日、私は彼の家を訪ねている。
博士は最近研究が忙しく、ほとんど家にはいない。

ガチャ

「哀ちゃん！いらっしやい！」

「蘭さん、こんばんは」

もう、彼女が彼の家に住んで4年。
いい加減慣れてしまったが、
今でも少しだけ胸が痛んだりする。
可愛い花柄のエプロンを身につけて、
可愛い花柄のスリッパを私に出して、
笑顔でキッチンまで一緒に行ってくれる。

ガチャ

「よお、哀」

キッチンには彼女の料理を
楽しそうに待っている彼。

「こんばんは、工藤君」

彼が元に戻った後、蘭さんが

『もう新一に戻ったんだからその

灰原つて呼び方やめたら？変よ？』

と言って、彼は私を『哀』と呼ぶようになった。

まあ確かに10歳も年下の私を苗字で呼ぶのは

周りから見ればおかしいし、蘭さんがそう言うのは

当たり前なんだけど、何だか距離が近づいて

しまったような、そんな気がして苦しかった。

まあ、これもいい加減慣れてしまったんだけど…

「今日、入学式だったんだろ？どうだった？」

「円谷君の挨拶が良かったわ、それに

クラスも一緒だったのよ…助かったわ」

「あ、まだ光彦に内緒なのか？蘭のこと」

「ええ、きつと驚くわね」

実は蘭さんは、今年から帝丹高校の保健の先生。
工藤君から『蘭がいるから帝丹高校にしたんだろ』
と笑いながら言われるが、それは違う。

「はい、ご飯できたよ！」

「うまそ〜！エビグラタンだ！」

「熱いから気をつけてね？」

蘭さんはニッコリ笑って、工藤君と私に
綺麗な焼き目のついたエビグラタンを出す。

「私、ちょっと仕事の電話してくるね」

「ああ」

パタンッ…

蘭さんが出て行ったことを確認し、
私は工藤君に話を切り出した。

「ねえ、貴方…私がどうして帝丹高校にしたか分かる？」

「え…っと、蘭がいるからじゃねえのか？家から近いし」

「ハズレよ、ハズレ」

「じゃあ俺が行ってた高校だからか？」

「…正解」

彼が元に戻って、もう一緒に学校生活を送ることはできなくなった。だけど、せめて彼と同じ学校に行つて彼と同じ空気を味わいたいなあなんて思つて、私は帝丹高校に進学することを決めた。

「え？正解？」

「貴方の高校生活の話聞いてたら、帝丹高校に行きたくなつたのよ…悪い？」

「い、いや！悪くねえよ全然！むしろ嬉しいぜ」

こんな形でも、彼といれることが私にとって本当に幸せだった。

ずるいけど、汚いけど、自分の気持ちを

押し殺してでも彼の傍にいたかった。

「そういえば…今年、あの日向グループのお嬢様が帝丹高校に入学したらしいぜ！」

「そつなの」

「噂だとすげえ生意気で、気に入らない奴はいじめたり嫌がらせしたりで中学の時に問題起こしたのを親の権力で揉み消したとか…」

「典型的なワガママお嬢様ね、園子さんと大違いだわ」

「だから、気をつけろよ？」

「あら、心配してくれてるの？」

「つたりめーだろ、お前結構打たれ弱えし」

工藤君はくしゃくしゃと優しく

私の頭を撫でてニカッと歯を出して笑う。

「ありがとう」

悔しいくらい、私の頬は熱くなって

胸はドキドキドキとうるさく鳴っていた。

4 (後書き)

ちよこつと整理しまそ！

光彦と哀が15歳の高1

新一と蘭は25歳ですね！

ちなみにまだ二人は結婚して無いです。

まあそこらへんは本編で書いて行きます〜

そして、遂に本編で暴れてもらう女

日向さんの名前が登場しましたね！

下の名前はまだ考えて無いですww

昨日のことがあったからか、
いつもより早く目が覚めたので
僕は少し遠回りをして灰原さんの家へと向かった。
歩美ちゃんに話したのか聞くか、聞くまいか…
僕の頭の中はそれでいっぱいソワソワしていた。

「よお、光彦」

突然後ろから声をかけられ、
僕の体はビクッと反応した。

「お、おはようございます、新一さん」

新一さんは、探偵として働いており
それはもう大人気探偵で、仕事の依頼は
後を絶たない。新一さんがスケジュールの
関係で受けられなかった簡単な依頼を僕が
受けることも多々ある。多忙だからなのか、
蘭さんとはまだ結婚していない。
だから、僕はまだ少し不安なのだろう。

「新一さん、朝早くからお仕事ですか？」

「ああ、早朝に起きた事件の調査に行くんだ」

「そうなんですか」

「あ、哀と同じクラスなんだよな？」

「へ？…は、はい！」

「そっか、良かったな！…じゃあ俺行くわ」

「頑張つて下さいね」

僕は新一さんに笑顔で手を振った。

大丈夫、ちゃんと笑えているはずだ。

時が経つに連れ、僕は新一さんに

憧れという感情だけでなく、嫉妬心も

抱いてしまっていた。探偵業を成功させ、

そして、今でも良く灰原さんと会っている。

僕が知らない所で…それが悔しかった。

新一さんにとって灰原さんは友達かもしれないけど、

灰原さんにとって新一さんは…

「おはよう、円谷君」

「は、灰原さん！おはようございます！」

灰原さんはクスツと笑って、歩き出す。

僕は灰原さんと人1人分の間を開けて歩く。

「あの、灰原さん……」

「何かしら？」

「歩美ちゃんに……」

この続きを上手く声に出せない。

口ごもる僕を見て、灰原さんは

僕が話したかった内容を察したのだろう。

「話したわよ、おととい……小嶋君にもね」

「ど、どうでしたか!？」

「小嶋君は何で今まで隠してたんだよ!って
凄く凄く怒ってね……そのまま帰ったわ。

吉田さんは、哀ちゃんは悪くない……とだけ言ってた」

「そうですね」

歩美ちゃんが灰原さんを憎んだりしてない、
そう解釈した僕はホツとした。

「けど、吉田さん…多分怒ってる」

「え、何ですか？」

「だって、いつもの彼女なら小嶋君みたいに
言っと思うの。嘘とか隠し事とか嫌いでしょ？」

確かにそうだ。

いつもの歩美ちゃんなら、

『歩美に隠し事なんてしないで』とか

『どうして話してくれなかったの？』とでも言っだろう。

「大丈夫です」

僕はポンツと優しく、灰原さんの肩を叩く。

「灰原さんは歩美ちゃんのことちゃんと

分かってるじゃないですか。歩美ちゃんも

きつと灰原さんのこと分かってくれますよ」

「円谷君…ありがとう」

「いえいえ、何かあったら僕に言って下さいね」

「ええ、約束するわ」

灰原さんは優しく微笑んで、スツと僕の前に小指を出した。

僕は慌てて小指を出して、ゆっくり灰原さんの小指と自分のを絡めた。

「何か照れますね」

「…そうね」

灰原さんの頬が少し赤く染まっていて、僕はなんだか嬉しくなった。

その時は、まだ気づいて無かったのだ。

僕達に向けられた恐ろしい視線に…

5 (後書き)

やっと少し進展しましたね！

さあ、次回から日向さんが…

次の更新は未定です><

お気に入り登録ありがとうございます！

入学式から二週間経ったある日。
僕はいつも通り灰原さんと登校した。
教室に着き、ガラッとドアを開けると
クラスのみんなが僕達に視線を向けた。
特に大きな音を立てた訳じゃないのに…

「あら、やっと来たのね」

良く見たら、僕の席に一人の女の子が
腕も足も組んで、こんな言い方失礼だが
凄く偉そうに座って、大きな声でそう言った。
そして、スツと立ち上がってツカツカと
僕達の方へ歩いて来る…

「円谷光彦君、よね？」

「は、はい」

その女の子は、僕より少し小さいくらいだから
多分168cmくらいあって、目がパツチリしてて
くるくる巻かれた茶髪のロングヘアで、色白で

いかにもお嬢様という雰囲気醸し出していた。

「初めまして、私…日向グループの

ヒュウカスミレ

日向董と申します、よろしく」

日向董、そう名乗る彼女はニッコリ笑って僕にスツと手を差し出す。

僕は少し躊躇いながらもその手を握った。

『良いなあ〜』という声が日向さんの

後ろからこちらを覗いている男子達から聞こえた。

「貴女は灰原哀さん、よね？」

「ええ…何故あなたが私の名を？」

灰原さんは笑ってそう聞いていたが、少し警戒している様感じた。

「さあ、何故かしらね」

その時、日向さんが浮かべた笑顔に僕は妙な寒気がした。

「私…あなたに忠告しようと思って」

「何かしら？」

日向さんはクスクスと笑って、

灰原さんを冷たい目で見て、僕に

話した時より遙かに低く、重い声で

「円谷君の周りをうろつかないで、目障りなの」

と、そう言い残して教室を後にした…

6 (後書き)

はい、来ました日向董さん！
すみれって平仮名にするか
悩んだんですけど平仮名だと
可愛いなあってことで漢字に！

とにかくひどい女です、はい。
幼稚なことから過激なことまで
とにかくもう犯罪だろお前！って
くらいひどいことします…はい
もう救いよりの無い馬鹿女で…

哀ちゃんいっぱい苦しみますが
幸せにしますのでそこは安心して下さい！

これからもよろしくお願いしますね^^*

あ、光彦目線がメインで後は哀が
ちよこちよこって書きましたが
これから新一、蘭、歩美目線で
書く話も少しあります、はい()

とりあえずぐちゃぐちゃしない様
頑張りたいと思います…頑張るぞ！

あの日向さんの忠告が始まりだった。

「見て、上履きに画鋏」

そう、灰原さんへの嫌がらせが始まったのだ。

「ひどいですね…」

「可愛い物じゃない、これくらいなら」

僕から日向さんにやめる様に言おうかと灰原さんに言ってみたが、灰原さんは好きにさせておきなさいとそう言った。逆に僕が口出ししたら灰原さんがもつと危ない目に遭いそうだから最初はただ見守ってるだけだった。

「灰原さん、元気出してね」

「あんなワガママ女に負けちゃダメだよ」

クラスのみんな（特に女子）は
灰原さんの味方で、優しく声をかけていた。
灰原さんは嬉しそうに笑っていて
僕もそんな光景を見て、自然に笑っていた。

「なーに笑ってんだよ、光彦！」

「お前本当に哀ちゃんのこと好きだな」

「そ、そんな大きな声で言わないで下さい！」

そんな僕にも友達ができた。

灰原さんとくっつく様に応援してやる！

と、クラスの男子もみんな味方をしてくれて
教室の居心地、雰囲気は本当に良かった。

が、しかし…

「あら、円谷君、偶然ね」

「日向さん、どうも」

廊下に出ると、決まって同じ柱の影から

笑って現れる日向さんに、僕はうんざりしていた。

「ねえ、私あなたが好きなのよ」

「はあ」

「だから、付き合ってちょうだい」

このやり取りはもう数十回目…

彼女とクラスが違って本当に良かった。

「僕はあなたと付き合えません」

こう言うと、日向さんは眉間に皺を寄せ、ムツとするが、すぐにまたニッコリ笑って、無理やり僕の腕を組んでくる。

「素直じゃないわねえ〜良い？」

私と付き合って、結婚すれば

あなたは自由に裕福な生活を送れるわ」

「僕は別に裕福な生活など望んでいません」

「あら、じゃあ探偵事務所設立しても良いのよ?」

「僕は自分の力で立てたいので…」

本当はすぐにでもこの腕を振り払って、教室に帰りたいかったのだが、灰原さんへの被害が軽く済むなら…と、僕は我慢して休み時間の半分を日向さんのために割いていた。

「ねえ、私少し気分悪くなっちゃったの」

保健室に連れてって下さらない？良いでしょ？」

「…分かりました」

僕は彼女を保健室に置いて、すぐに教室に帰ろうと思い、嫌々ちゃんと連れて行った。

ガラッ…

「失礼しまーす」

「あら、どうしたの…って光彦君！」

「ら、蘭さん！？ここの保健室の先生だったんですか！？」

「ええ、言って無かったわね」

蘭さんは白衣を着て、水槽で飼われている金魚たちに餌をあげていた。

「あら、蘭さんって…毛利蘭さんかしら？」

「ええ」

「あの毛利小五郎さんの娘で、名探偵の工藤新一さんの…奥様だったかしら？以前、新聞とニュースで拝見しましたわ」

「いいえ、まだ結婚はしてないわ。」

「ところでどうしたの？具合悪いの？」

「ええ…少し頭が痛みますの」

日向さんはわざとらしく頭を抱えた。

蘭さんは仮病だと分かっていたと思うが、とりあえず日向さんをベッドに寝かせた。

「工藤新一さんの奥様、だって」

蘭さんは嬉しそうに、恥ずかしそうに優しく微笑みながら僕に温かい紅茶を出す。

「早くそうなれたら良いなあ。」

けど、もう少し働きたいなあって

思ったりもして…まあ新一次第かな」

「そうですか、結婚式には呼んで下さいね」

蘭さんは飲んでいた紅茶を吹き出し、

けほけほと咳込みながら僕の肩を軽く叩く。

「哀ちゃんはクラスでどう？」

「楽しそうですよ」

「良かった、最近表情が明るいの。」

昨日もうちに来て新一と楽しそうに

話しててね、ちょっと嫉妬しそうな

くらいあの二人仲良しなのよ、ふふっ」

昨日、も。

やっぱり灰原さんは今でも新一さんのことが…

「そうですか…」

僕は残っていた紅茶を飲み干した。

僕は紅茶を飲み終えた後、
すぐに保健室から出た。
やっと彼女から開放された僕は、
晴れやかな気持ちで教室へ戻った。

ガラッ

「光彦くおかえり」

「またあのお嬢様に振り回されたか？」

そんな風に言ってくる男子達に
僕は頷いて、苦笑いしながら席に着いた。
今は、人と明るく話せる様な気分では無い。

「ねえ、円谷君」

そんな時、突然灰原さんから話しかけられた。

「灰原さん…どうしました?」

「あのね、今日買い物に付き合ってくれない?」

「買い物?」

「来月、工藤君の誕生日じゃない?
だからそろそろプレゼント考えようかなって」

「…いい、良いですよ」

本当は嫌だ。

灰原さんと一緒に買い物に行ける幸せより、
灰原さんが新一さんの誕生日プレゼントを
選ぶ光景を見る辛さの方が上回りそうで…

「ありがとう、放課後保健室行って良い?」

「蘭さんに会いに行くんですか?」

「あら、知ってたの?」

「さっき話してきましたから」

灰原さんはクスツと笑う。

「工藤君ね、貴方を驚かそうと
蘭さんのこと内緒にしてたのよ？」

「そうなんですか」

また、僕が知らない所で…

「じゃあ、放課後ね」

灰原さんは自分の席へ戻って行った。
僕は日向さんのせいで食べ終わっていない
お弁当を取り出して黙々と食べていた。

「馬鹿ですねえ…」

凄く情けなかった。

高校に入ってから、灰原さんへの
想いに気づいてから、僕は新一さんに
嫉妬ばかりして…灰原さんのことで
こんなに落ち込んで、何なんだろう。
灰原さんを独占したい、なんてそんな
気持ちは抱いて無いけど…僕ももう少し
灰原さんとの距離を縮めたいなあ、とは思っ

ガラッ

5時間目の先生が入ってきた。
僕はハアとため息をつきながら
空っぽになったお弁当箱を鞆にしまった。

キーンコーンカーンコーン…

「終わったあ…」

午後の授業は本当に退屈だった。
先生が一方的に話して、勝手に
進んでいくようなスタイルで、
半分近くが眠りについていた。

「円谷君、行きましょ」

「はい」

けど、僕の気持ちは少し晴れていた。
僕の脳内は『退屈』の二文字に支配されたからである。
退屈だ、退屈だなんて考えていたら昼休みの出来事の
記憶が少し薄れていったように感じた。

ガラッ

「あら、哀ちゃんと光彦君」

「こんにちは、蘭さん」

「どうかしたの？」

「実は今日工藤君の誕生日プレゼント
探しに行こうかなって思ってるの。
彼って何が欲しいのか分からなくて、
だから蘭さんに相談しに来ただけど……」

「そう、うーん…あ、新一ねえ最近
気に入ってたマグカップ割っちゃったの。
だから、マグカップなんてどうかなあ〜？」

「マグカップ、良いですねえ」

「ありがとう、蘭さん」

蘭さんはニツコリ笑って、
行ってらっしゃいと僕達に手を振った。
僕達も手を振り返して保健室を後にした…

シャツ！

「毛利先生、今のって…」

「あら、やっと起きたのね。
今のは灰原哀ちゃんと円谷光彦君よ。
あ、日向さんって二人とお友達なの？」

「え、ええ…ところで灰原さんって
あの工藤新一さんとどうゆう関係なんですか？」

「哀ちゃんはお隣さんなの。
新一とは10年くらいの付き合いで
とっても仲良しなのよ…それが何か？」

「い、いいえ！ありがとうございます！それじゃ！」

ガラッ

「…良いこと聞いちゃったわ」

「今日はありがとね」

「いえいえ、どういたしまして」

二人で米花デパートに向かい、購入したのは綺麗な青いマグカップ。僕は誰へのプレゼントかなんて忘れて、シヨッピングを思う存分楽しんでいた。

「それじゃあまた明日」

いつも通り、灰原さんを家まで送り僕は笑顔で手を振って別れようとした…

「待って、円谷君」

灰原さんの言葉で僕の足は止まり、すぐさま振り返ると、灰原さんの手には綺麗にラッピングされた箱が一つ。

「今日、買い物に付き合ってくれたお礼」

「え？僕のために…？」

「ちょっと円谷君には可愛すぎたかもだけど、私と色違いなの。良かったら使ってちょうだい」

邪魔な鞆を足元に置いて、ラッピングを破らない様に丁寧に開けると、中には黄緑と白のボーダー柄のマグカップ。

「あ、ありがとうございます！」

大事に使います！毎日使います！」

「そんなに喜んでくれると思わなかったわ」

灰原さんはクスクスと大げさなくらい喜ぶ僕を見て楽しそうに笑ってくれた。

「じゃあ、また明日ね」

「はい！また明日！」

灰原さんと別れ、うきうきしていた僕は鼻歌を歌いながら家へと歩いていった。

「あれ…？」

良く見ると家の前に誰か立っていた。セーラー服を着た女の子…

「歩美ちゃん？」

僕が少し大きめな声でそう言うと、その子は僕を見て大きく手を振る。

「やっぱり歩美ちゃんだ」

僕は歩美ちゃんの元へ急いで走った。

「えへへ、来ちゃった！」

無邪気な笑顔に、トレードマークの
カチューシャは変わらないが、制服のせいか
凄く大人になった様な、そんな気がした。

「どうしたんです？」

「実は…ちょっと話したいことがあって」

僕はすぐ、頭に灰原さんの顔が浮かんだ。
そして、朝の会話が頭で勝手に再生される…

「何ですか？」

僕は、仲の良い二人が好きだから
どんなことがあってもずっと仲良しで
いて欲しい、とそう思ってる。

「哀ちゃんのことなの」

やっぱ…

僕の勘は当たってしまった。

「歩美ね、いっぱい考えたんだけどね」

「はい…」

「哀ちゃんは大切なお友達だって、ちゃんと分かってるの…だけどね」

「だけど…？」

歩美ちゃんは目にたくさん涙を溜めて、僕の制服の裾をギュウツと握って、俯きながら

「歩美、哀ちゃんのこと許せそうにない…」

と、そう言った…

円谷君は灰原さんが好き。

灰原さんは、私の勘だけど

おそらく工藤新一が好きで、

工藤新一は毛利先生の彼氏さん。

「最低ね、あの女…」

私の円谷君の好意を受けずに

相手がいる工藤新一に想いを寄せて、

きっと円谷君は傷ついてるわ。

「まあ、まずは証拠を見つけなきゃね」

私の予想がもし現実だとしたら…

「この董様がぶっ潰すしか無いわね」

そんなことを考えながら歩いていると、

円谷君が前方に見えた。本当に偶然。

ううん、運命なのかもしれない。

入学生代表の挨拶、それがきっかけ。
私は彼に一目惚れして…

「あら？」

円谷君がセーラー服の女の子に
手を振って…走って行って…

「誰よ、あの女！」

私は円谷君達にギリギリまで
近づいて、電信柱の影に隠れた。
そして、ポケットからボイスレコーダーを
出して二人の会話を録音しようと試みた。

「許せない…何故、ですか？」

「何故？光彦君なら分かるよね？
歩美、ずっとコナン君が大好きだった。
出会った時から…ずっとずっとだよ？」

連絡取れなくても、ちゃんと待ってたのに」

歩美ちゃんはポロポロと涙を流す。

思い返してみると、歩美ちゃんの涙は

コナン君が転校という形で帝丹小学校を

去ってしまったあの日以来見ていなかった。

「帰って来ないならそう言っただけだった。

期待なんて、させて欲しく無かったのに！」

「歩美ちゃん……」

「哀ちゃんと二人でゆっくり話そうと思って、

この前哀ちゃん家行ったんだ……そしたらね

哀ちゃん楽しそうに新一さんと家の前で話してて」

「灰原さんが？」

「哀ちゃん、新一さんのこと好きなんだなって

見えて思ったの。けど、それはダメなんだよ？

だって、新一さんには蘭さんがいるんだよ？

歩美は、コナン君と新一さんが同一人物って

分かって……けど、新一さんを好きって思っちゃ

ダメだってちゃんと言い聞かせて、我慢したのに！」

歩美ちゃん、本当はあの電話の時に

このことを話したかったのかもしれない。

全部、全部ぶちまけてしまいたかったんだろう。けど、優しいからずっと我慢してたんだ…

「分かってるの、哀ちゃんは歩美と元太君を混乱させない様に、多分新一さんと決めて隠してきたんだろうって。けど、この9年間歩美、すっごくすっごく辛かったんだよ…？」

そう、頭では分かっているつもりでも心は分かってくれなくて…僕は痛いくらい歩美ちゃんの気持ちが分かってたけど、震えながら僕の制服の袖を掴む手を優しく握ってあげることしかできなかった。

「ゴメンね、光彦君…」

僕は左右に首を振って、歩美ちゃんに優しく笑いかけてみせた。

「決まりね」

あの歩美とかいう女が言っていた。
コナンとか同一人物とかは良く分からないけど、
とにかく、ハッキリ分かったことが一つ。
私の予想通りだった…

「灰原哀は、工藤新一が好き…」

10 (後書き)

ってことで、とうとうバレました。

さあこつから悪女ってかもはや悪魔な

董ちゃんにたくさん暴れていただきましょ！

お気に入り登録ありがとうございますー

すごく嬉しいです、本当感謝です

しばらくはこちらの連載に力入れて

いきますのでよろしく願いします^^*

『歩美、決めたの！コナン君の帰りを待つつて！』

『ねえ、光彦君！今日ね、夢にコナン君出てきたんだ！』

『あの人の眼鏡すつごくコナン君そっくりだね！』

『コナン君と一緒に中学校行きたかったなあ…』

蘇る幼い日の記憶。

それは全て歩美ちゃんがコナン君へ

向けた発した言葉たちだった。

「歩美ちゃん…」

僕だって歩美ちゃんにずっと隠していた。

コナン君が新一さんと知って、ずっと。

灰原さんにだけ歩美ちゃんの怒りの矛先が

向いてるなんて、そんなの間違ってるんだ…

「言わなくちゃ」

さっきから何度もベッドの上でそう唱えるが、僕は携帯を握っては、離すを繰り返していた。灰原さんが好きだから、守ってあげたいから、支えてあげたいから、二人を仲直りさせたい。まずは、僕が正直に言って謝らなきゃ…。だけど、歩美ちゃんに嫌われたくない。

「ずるいなあ、僕は」

コンコンッ

「はい」

ガチャ

「みつちゃん、はいどうぞ」

姉さんがニッコリと笑って、僕が灰原さんに貰ったマグカップにホットココアを入れて持ってきてくれた。夕飯を食べ終えてすぐに部屋に閉じこもってしまったから心配して来てくれたのかもしれない。

「ありがとうございます」

姉さんはまたニッコリ笑って、部屋を出た。

「美味しい…」

心身共に温まったような、そんな気がして
僕は自然に微笑んでいた。

「電話じゃ、ダメですね」

ちゃんと直接会って言おう。
僕は歩美ちゃんに一文送って、
マグカップを片付けに降りた。

『歩美ちゃん、今度の休日会えますか？話があります。』

「ふわぁ…」

マグカップを片付けて、僕はすぐに寝てしまっていた。たくさん寝たはずなのに、僕は欠伸ばばかりしていた。

「あら、眠そうじゃない」

顔を上げると目の前に灰原さんの顔。

「うわぁっ！び、びっくりした…」

「ゴメンなさいね、だって貴方ずっと俯いて欠伸ばばかりしてるから…
ちよっと驚かせようと思ってね、ふふ」

驚いたからなのか、灰原さんの顔が近かったからなのか、僕の心臓の音はうるさく強く鳴っていた。

「円谷君、学校着いたわよ」

気がついたらもう高校の前。
ボーっとしていたら着いていたのだ。

「へ、ああ…すみません」

昨日の歩美ちゃんとの話を思うと、
灰原さんとなんだか話しづらいなあ…
なんて思いながら下駄箱を開けて、
上履きに履き替えた。

「キヤ、キヤアアアアア！！！！」

突然玄関中に響き渡る叫び声。

「は、灰原さん！？どうしました！？」

灰原さんの下駄箱の中には数匹の
蛇がニヨロニヨロと動いていて、
当然上履きは蛇のせいでネットリとした
液体のような物で覆われていた。
蛇が外に逃げ出すと困るので、すぐに閉じる。

「…日向さん、ですね」

とりあえず僕は履いていた上履きを
灰原さんに差し出した。

「とりあえず、職員室でスリッパ
借りるまでは僕の上履き履いて下さい」

「円谷君…ありがとう」

僕は灰原さんの肩をポンポンと
叩いて、ニコツと笑って見せた。

…どうして、画鋏から蛇に？
どうして急にひどくなったんだ？

僕は考えこみながら灰原さんと職員室へと向かった。

「失礼しました」

僕達は職員室に向かい、担任に事情を説明した。さすがに日向さんの名前は出せなかったが、下駄箱の蛇をなんとかしてくれとそう頼んだ。

「画鋏じゃ物足りなくなったのかしら？」

こんな状況でも灰原さんはクスツと微笑む。けど、少し肩が震えていて額からツーツと汗が流れていたのに気づいた僕は、タオルで優しく汗を拭いてあげた。

「ゴメンね、円谷君。ありがとう…」

「いえ、こうなってしまったのも僕のせいですから」

僕は中途半端だ。

日向さんのことも歩美ちゃんのことも…

「いいえ、円谷君のせいじゃないわよ。

全ては灰原哀のせいなんだから…ふふ」

「ひゅ、日向さん!？」

気がついたら日向さんが僕の真後ろに立っていた。

「私の忠告を無視した上に、円谷君の

優しさを弄ぶなんてなんて悪女なのかしら」

いや、日向さんに言われたく無いわ

と言いたげな顔で灰原さんは日向さんを見ていた。

「良い?その内クラスにもいれなくなるわよ…

何故なら私はあなたの弱みを握っているのだから」

「弱み?」

「ふふ、まあまだばらさないであ・げ・る」

日向さんはクスクスと意地悪く笑って、

すれ違う際にわざと灰原さんの足を踏んでいった。

「痛ッ…」

「灰原さん！！すぐ保健室行きましょう！！」

「大袈裟よ、心配しないで」

灰原さんはニコツと優しく笑って、
スタスタと教室へ歩いていった。

僕の頭の中は日向さんの言葉でいっぱいだった。
灰原さんの弱みって一体何なんでしょう？

「日向、董…」

そもそも彼女はどんな人物なんだろう？

日向グループのお嬢様だということしか知らない。
気配を感じさせず、灰原さんへの嫌がらせの
レベルも普通じゃない。いくらなんでも…

「そつだ！」

僕の頭にある一人の人物が浮かんだ。
そしてすぐに携帯を取り出し、メールした。

『今日会えませんか？聞きたいことがあります。』

「おつそーい！この園子様を待たせるなんて100年早いわ！」

「す、すみません…掃除当番になってしまつて」

そう、僕の頭に浮かんだ人物とは園子さんだ。
彼女ならきつとパーティーなどで日向さんと
関わっていたり、噂を聞いているのでは無いかと
そう思ったからである。

「ファミレスで一人つて寂しいんだからねっ！もう！」

園子さんはドリンクバーとケーキを頼んでいた。
良く見たらケーキのお皿は二枚。一人でも楽しく
食べていたんだなあと思うと思わず笑みが零れた。

「すみませーん！ドリンクバー一つ追加で！」

そして勝手に僕の分を頼む園子さん。
別に水で良かったのになぁと思いつつ
僕はメロンソーダを入れてきた。

「で、私に話って何？言つとくけど私には真さんが
いるからいくらあんたの頼みでも二人でデートはダメよ」

「い、いえ…デートだなんて」

「じゃあ何よ〜」

園子さんは頬杖をつきながら、
携帯電話の画面を眺めていた。

「あの、実は日向董さんについてお聞きしたいのですが」

「…え??？」

さっきまであんなに笑っていた園子さんの
顔から一気に笑顔が消え、眉間に皺を寄せる。

「あの女と関わっちゃいけないわ」

初めて見た園子さんの真剣な表情に
僕は唾をゴクリと飲み込んだ。

園子さんはハアとため息をつき、
オレンジジュースを一口飲んだ後に
日向さんのことを語りだした。

「日向薫。日向グループの一人娘。

…正確に言くと、中1の時にね、

お姉さんを亡くしてるのよ。

私も昔は結構パーティで話したわ。

素直で無邪気で凄く良い子で、

お姉さんの蓮華レンゲさんが大好きで

お姉さんの自慢ばかりしてたのを覚えてるわ」

素直で無邪気で良い子…

今の日向さんからは想像できない。

「お姉さんが亡くなってからよ、あの女が変わったの」

「え？」

「私も詳しくは知らないけど、気に入らない子達は
徹底的にいじめたりして学校から追い出したり…」

とにかく、良い噂なんて無いわ。それに日向グループも裏で危ないことやってるって噂あるしね〜怖い怖い。

だから、あんたはあの女に関わっちゃダメよ！

あんた成績一番だったんでしょ？恨まれてるかもしれないわ！」

いや、恨まれてるところかむしろ迫られてる…

まあこれで日向さんのことは少し知れたんだ。

きつとお姉さんが死んだ悲しみをいじめで

発散しようと思って…けど、どんな理由があっても

やっぱりいじめなんて許されることじゃない。

ちゃんと日向さんと話をしよう。

「いえ、大丈夫です。ありがとうございました！」

園子さんには、灰原さんが日向さんの

被害に遭っているなんて言えなかった。

園子さんなら日向さんの家に入り込んで

文句言いそうだし…それに、新一さんに

言ってしまいそうだし。ここは、僕一人で

頑張りたかった。何としても僕が灰原さんを

守りたかったんだ…

けど、僕の考えは甘かった。

「お帰りなさいませ、董お嬢様」

ああ、こんな家に帰りたく無いのに…
なんて思いながら、警備にドアを開けさせる。

ギイイイイイイイ

「ただいま」

「お帰りなさいませ、お嬢様」

「爺、今日パパとママは？」

「お二人共会議で今日も帰りません」

「そう、せいせいしたわ」

あんな奴らが家にいたら、
私の居場所が無くなってしまっ…

「爺、夕食を済ませたら散歩しても良いかしら？」

「一人でですか？危のおございます！」

「大丈夫よ、護身用のスタンガンと防犯ブザー

持って行くから。それで良いでしょ？爺、お願い！」

「…分かりました」

私は鞆にスタンガン、防犯ブザー、
デジカメ、先ほど大活躍した
ボイスレコーダーを入れて、
あの女：灰原哀の家へと向かった。

「哀君、足の指腫れてるじゃないか！」

私は円谷君が用事があるということ、
日向さんに踏まれた足を引きずりながら、
一人寂しく帰って来た。

博士は私が足を引きずっていることに気づき、
すぐに救急箱を持ってきてくれたのだ。

「大丈夫、ちょっと踏まれただけよ」

「ふ、踏まれたじゃと！」

「あ、…事故よ事故」

博士には言えない。

ただでさえ仕事が忙しいのに、
きつと嫌がらせされてるなんて言ったら、
凄く心配して、大きな負担をかけることになる。

「薬塗って少し冷やせば大丈夫よ」

「ならいいんじゃないが…」

「心配しないで頂戴」

私は博士にニッコリと笑いかけ、
玄関に鞆を置きっぱなしにしていた
ことを思い出し、玄関へと向かった。

ガチャ

「…く、工藤君」

「詳しい話聞かせてもらおうじゃねえか、哀」

「何でいるのよー！」

「ああ、博士に借りてたパソコンの本返しに来たんだ。

そしたらリビングでお前と博士が話してたから…っつい」

「一番知られたく無かったのに…」

貴方の言ってた日向グループのお嬢様に

いじめられてますなんて言える訳無いじゃない。

「盗み聞きしてた通り、廊下で知らない人に

ぶつかって足を踏まれただけよ。大丈夫だから」

「バーロー。お前博士に踏まれたじゃと！？って

聞かれた時、動揺してとっさに言い訳しただろ」

ああ、やっぱりこの人は凄い。

博士は騙せても工藤君は騙せそうに無い…

けど、言いたくない。

これ以上彼に守ってもらう訳にはいかない。

「そんなこと無いわ、貴方の気のせいよ」

だから私は冷たくそう言っつて、玄関のドアを開け
工藤君を押して追い出そうとしてみた。

「…お前いつからそんな分かりやすくなつた？」

「何のこと？」

「まあ、それだけ警戒したり自分を隠そうと
しなくなつたつてことだから良いけどよお」

そう言つて、工藤君は渋々靴を履きだした。
本当は帰らないで欲しい、傍にいて欲しい。
けど、それは決して許されないこと…

「哀、何かあつたら俺に言えつて言つただろ？
お前が話す気になつたらいつでも聞いてやるから」

「ありがとう」

工藤君はニカツと歯を出して、
私に小さく手を振つて、帰って行く…

「あら？」

足元を見ると、工藤君の手帳が落ちていた。私はすぐに靴を履いて、足の痛みなんて忘れて玄関を飛び出し、走った。

「工藤君待つて！」

工藤君は私の声に振り返り、目線が私の手にある手帳へと移る。わりいわりいと言いながら、ゆっくり工藤君が歩み寄ってきた…その時だった。

ズキンッ！

「痛ッ…！？」

無理して走ったからか、激痛が走り足の力が抜け、転びそうになった。私は思わず目をギュッと瞑る。

ガシッ！

「あつぶねーなあ…ったく」

私の体は工藤君の腕に支えられていた。

「い、いめんなさい」

パシヤパシヤ

「ん…？あ、手帳ありがとな！」

「いいえ、気にしないでちょうだい」

ドキドキドキドキ…と鳴り止まない私の心臓。
頬が一気に熱くなり、周りなんて見えてなかった。

だから、私は全く気づかなかった…

14 (後書き)

さて、董さんが行動に出ましたね！

ちょっと描写がひどくてすいません

最初は暴力的ないじめを描こうと

思ってたんですが、やっぱり精神的な

いじめの方がストーリー上良いなって

ことで残酷な描写ありを外させて頂きます。

「園子さん、ありがとうございました」

「もし何かされたら私に言いなさいよ、良いわね？」

「…はい！さようなら！」

僕は園子さんと別れ、

帰宅しようと歩いていた。

言いなさいよと言われたのに、

灰原さんの被害のことを

園子さんに話さなかったほんの少しの

罪悪感を胸に抱きながら…

「光彦じゃねーか！」

「へ？」

僕は突然、おもいつきり

後ろから背中を叩かれた。

あまりの痛さに顔が歪む。

こんなことをする人は…

僕は、ゆっくり振り向いた。

「やっぱり元太君！」

元太君とは、灰原さんが
コナン君の事実を話した日から
一度も会っていないかった。

元太君はサッカーの自主練で
忙しそうだったし、僕自身少し気まずくて…

「久しぶりだな！ちょっと話さねーか？」

「良いですよ！」

「んじゃあ公園にでも行くこうぜ」

僕は笑顔で頷いた。

「はい、元太君」

僕は部活で疲れてるであろう

元太君に冷たいジュースを買ってきて、
元太君の隣に座った。

「サンキュ。にしても懐かしいなあ…米花公園」

「よくここで遊びましたよね」

かくれんぼ、サッカー
おにごっこ、缶蹴り…
懐かしい記憶が蘇る。

「なあ、お前灰原とはどうなんだ？」

「ど、どうって…あ、同じクラスになりました」

「良かったじゃねーか！」

元太君は歯をニカツと出して笑う。
良かった、ちっとも変わってないや。

「俺さ、灰原にひどい言い方しちゃっただろ？
謝りに行くこうと思ってた時にお前に会ったんだ」

「そ、そうだったんですか！」

「ああ、隠してたのは正直すげえムカついた。けど…それは灰原が俺達のこと考えてたってことだもんな。灰原…俺のこと怒ってるかな？」

「いいえ、そんなことはありません。行きましょう！」

元太君はもう大丈夫だ。

後は歩美ちゃん。大丈夫、歩美ちゃんならきつと昔みたいに帰れる…

僕は元太君と一緒に灰原さんの家へ向かった。

「歩美、じゃあね！」

「うん、ばいばい！」

高校の友達と別れ、家へと歩く。

帝丹高校の生徒が向こうから

ぞろぞろと歩いてきたら、

光彦君と哀ちゃんを探したりして。

…哀ちゃんを探して歩美はどうするのかな？

怒る？泣く？それとも許してあげる？

昨日、光彦君に会ってから歩美はそんなことばかり考えていた。

「あの…歩美さんよね？」

考え込んでいたら、突然声をかけられた。帝丹高校の制服を着た、背の高い美人さんに。

「誰、ですか？」

「日向薫、円谷君のお友達です」

「あ、吉田歩美です…何か用ですか？」

薫さんは、ニヤリと笑って鞆から一枚の写真を取り出す。

「これを見てくださる？」

歩美は薫さんから裏返しの写真を受け取る。何だろう？と興味本位で勢い良くひっくり返す。

「え…」

「これ、誰か分かるわよね？」

手が震えて、声が思うように出ない。
後ろから堅いもので頭を思いつきり
殴られたような、そんな衝撃が体中を走る。

「灰原哀と工藤新一、知ってるでしょ？」

写真に写っていたのは、新一さんと
哀ちゃんが密着している姿だった。
新一さんの腕に、もたれかかる哀ちゃん。

「…哀ちゃん」

どうして？何で？なんて考えられずに
気がついたら目から勝手に涙がポロポロ
零れて、頭の中は哀ちゃんへの怒りで
いっぱいになっていた。

「ねえ、歩美さん。私と手を組ま…」

「ゴメン、歩美行かなくちゃ！」

歩美は董さんの話の途中で逃げ出した。

…ううん、逃げたんじゃない。

哀ちゃんの家に行くために走り出した。

「…私も、灰原哀の家に行かなくちゃね」

灰原さんの家に着くと、元太君が
ここからは一人で行かせてくれ！と
そう言つてインターホンを押す。

僕は笑顔で頷いて、門の所で待つことにした。

「後は、歩美ちゃんと日向さんかあ…」

僕一人で本当にできるのかなあ。

なんて考えていたら、向こうから

誰かが走つてくるのが見えた。

セーラー服を着て、カチューシャを付けた…

ん？あれつてもしかして歩美ちゃん？

「み、光彦君！」

やっぱり歩美ちゃんだった。

徐々に近づくにつれ、見える彼女の表情。

…泣いてる？

「着いたあ…ハア、ハア」

歩美ちゃんは鞆から可愛いピンク色の
タオルを取り出して、流れる汗と目に溜まる
涙を拭いて、大きく深呼吸をする。

「歩美ちゃん、僕…言わなきゃいけないことが」

「ゴメン、光彦君！哀ちゃんは？哀ちゃんいる？」

ハアハアと息を切らしながら、歩美ちゃんは
僕ではなく灰原さんの家を厳しい顔で見つめていた。

「今、元太君が謝りに行っています」

「謝る？」

「はい、灰原さんにキツク言い過ぎたって」

そう言うと、歩美ちゃんの表情はますます曇り
眉間を皺を寄せて、怒っているんだと分かった。
けど、何でいきなり…？

「歩美ちゃん、落ち着いて下さい。何があったんですか？」

僕は震える歩美ちゃんの肩をガシツと掴んで、しっかり目を見てそう聞いた。

「…光彦君」

歩美ちゃんは目に涙を溜めて、僕の顔を見上げて、強く言った。

「光彦君は歩美と同じ、哀ちゃんに
いっぱい傷つけられてるんだよ!!」

言葉の意味が良く分からなかった。
何かあったのだろうか？昨日の今日で
二人の間に何かあったのだろうか？

ガチャ

こんなタイミングで、元太君が
ケタケタ笑って玄関から出てきた。
灰原さんと一緒に…

「おお〜歩美！久しぶりじゃねえか！」

元太君は歩美ちゃんに笑顔で手を振る。
が、歩美ちゃんはそんな元太君を素通りして
灰原さんの正面に立った。

「吉田さん…」

パンツ

「あ、歩美ちゃん!？」

歩美ちゃんは勢い良く、灰原さんの頬を叩いた。

「…どうして、どうして哀ちゃんは

新一さんの腕にもたれかかったの？」

灰原さんは叩かれた頬を手のひらで
抑えながら、目を見開いていた。

元太君は歩美ちゃんの行動に口をポカンと
開けて驚いていた。僕は、信じられなかった。
あんなに温厚な歩美ちゃんが…灰原さんの頬を…
それと、歩美ちゃんが言った新一さんの腕に

もたれかかっていたという話も信じられなかった。

「貴女、どうしてそれを…」

「良いから答えて、哀ちゃん!!」

歩美ちゃんの気迫に

灰原さんの肩がビクツと反応した。

「あれは、転びそうになったのを

助けてもらったただけよ…誤解しないで」

「…けど、嬉しかったでしょ?」

「え?」

「好きな人に助けて貰って嬉しかったでしょ!!」

歩美ちゃんは涙をポロポロ零しながら、
走って僕達の元から去ってしまった。

「あ、歩美ちゃん!!」

本当はすぐ追いかけてよと思った。

けど、灰原さんをほっとけなくて…

「光彦、俺が歩美追いかけるから

お前は灰原の傍にいてやれ！良いな？」

元太君は僕の気持ちを察してくれたのか、
すぐに走り出して歩美ちゃんを追いかけた。

「円谷君…」

振り返ると、灰原さんは
ポロポロと涙を零していた。
心細そうに、震えながら…

「大丈夫、大丈夫です」

僕は気がついていたら灰原さんを
強く抱きしめていた。

16 (後書き)

ちよつとストーリー展開

失敗したかもしれない(泣)

歩美ちゃんこんなに可哀相な

展開にする予定じゃなかったのに…

哀ちゃんより歩美ちゃんが

可哀相じゃないですか

これじゃあ光彦君…ねえ？

けどここで元太君がきつと

頑張ってくださいます！うん！

頑張って上手くまとめます！

「ハア、ハア、ハア……」

歩美、哀ちゃんのほつぺた

思いつきり叩いちゃったんだ。

哀ちゃんの話も聞かずに、

勝手に怒って、勝手に逃げて……

もう哀ちゃんと友達に戻れないかな？

哀ちゃん、歩美のこと軽蔑したかな？

「待てよ、歩美！」

ガシッ

「げ、元太君！」

歩美は元太君に腕を掴まれた。

腕をブンブン振ってみるが、

元太君は離してくれない。

「歩美、何かあったんだろ？」

歩美なんてほっとけば良いのに。

それか、何であんなことしたんだ！

って怒れば良いのに…元太君は

凄く穏やかな表情を浮かべていた。

「どうして追いかけてきたの？」

「どうしてって、俺達友達だろ？」

「…けど、歩美あんなことしちゃった」

「何かあったんだろ？じやなきや

歩美があんなことする訳ねーもんな」

元太君はポンポンと歩美の頭を

優しく撫でて、ニカツと歯を出して笑った。

元太君の優しさに涙が零れそうになる。

「…あのね、董さんっていう光彦君の

友達に声をかけられたの。それでね、

一枚の写真を見せられて…そこに

哀ちゃんが新一さんの腕にもたれかかっ

「待った！何でそいつがそんな写真持ってたよ！」

「え？」

「それに、何でそいつ歩美のこと知ってたよ」

「え、それは…」

冷静に考えてみたらおかしいことだらけだ。
カッとなってちゃんと考えられなくて、
気づいたら哀ちゃん家へ走り出してたから…

「光彦にそいつのこと聞きに行こーぜ！」

それと、灰原にちゃんと謝れよな。

そうすれば絶対仲直りできるって！な？」

元太君はすっかり大人になってしまった。
小学生の時は食べ物を優先してたけど、
中学生になってからはずっとサッカー
頑張ってる、サッカー強い高校に入るために
一生懸命勉強して、無事に入学して…
それに比べて歩美はちっとも変わってない。

「ありがとう、元太君。」

歩美、哀ちゃんとちゃんと話すよ！」

歩美は精一杯の笑顔を元太君に見せて、
哀ちゃんの家へ走って向かった。

17 (後書き)

元太のイメージ図は
結構シュツとした感じですが。
絵にしようと思ったんですが
あの輪郭に会う髪形なんて
思い浮かばなくてですねえ

描けたらツイッターにでも載せよ！

歩美ちゃんの問題は結構
あっさりと解決しますー

ちよっと前書きと違う展開に
なります、すいません。

これから編集しようと思います。

日向さんは、本当にはちゃめちゃんな女。
とにかく頭おかしいです、最低です
だからこの子をどう大人しくさせるか
それを悩んでるところですーはいー
けどラストの展開はもう想像できてます^^

BGM：GARNET CROW『二人のロケット』『未完成な音
色』

とりあえず、僕は灰原さんと共に
家の中へ入った。博士は泣く灰原さんを見て、
すぐに温かいコーヒーを作って出してくれた。

「ありがとう、博士」

「わしは少し出かけてくる、哀君を頼む」

博士は本当に用事があったのか、
それとも僕達に気を使ったのか、
それは分からなかったが、家の中は
僕と灰原さんの二人になった。

「あんなに感情的な彼女、初めて見た」

灰原さんの涙は止まっていたが、
とても切ない表情でそう呟いた。
僕は未だに信じられなかった。あんなに温厚で
優しい歩美ちゃんがあんな風になってしまっなんて…
それに、転びそうになった灰原さんを支える新一さん。
その光景を見たならすぐに灰原さんと話せば良かったのに、

歩美ちゃんは遠くから泣きながら走ってやってきた。
そんな歩美ちゃんの行動がどうも僕は引っかけた仕方が無い。

「吉田さんは私が工藤君のこと
好きだって思ってるみたいね」

「え??？」

「だって、好きな人……って言うてたじゃない??？」

「そうですね」

「工藤君はただのお隣さんなのに……」

灰原さんはそう言ってコーヒーを口にする。
僕は凄く複雑だった。

「円谷君、どうしたの??」

灰原さんは好きだという気持ちを
押し殺してコナン君を新一さんへ戻した。
灰原さんは凄く辛かったんだって、
それはちゃんと分かっているつもりだ。

「具合でも悪いの??」

けど、真実を知らずにずっとコナン君を
想い続けた歩美ちゃんもっとな…

「円谷君！」

「…は、はい！何ですか？」

「何を考えてたの？」

「い、いえ！…あまり気を落とさないで下さいね」

「ありがとう、私なら大丈夫よ」

僕自身、どうすれば良いか分からない。
昨日から考えがぐちゃぐちゃで、まとまらない。
何とかしなきゃ、何とかしなきゃなんて口だけ…

「僕、そろそろ帰りますね」

「ええ、ありがとう」

「じゃあ、また明日」

僕は逃げるように灰原さんの家を出た。

これ以上、灰原さんと一緒にいても
僕は何もしてあげられないだろうし、
それに、僕もちゃんと考えを整理したかった。

「あら、円谷君じゃない」

「…日向さん!?!」

日向さんは突然、門の影からひよっこり
現れて笑顔で僕に手を振ってきた。

「歩美さん、凄かったわね」

「え?」

「灰原哀のほっぺをビンタしちゃうなんて」

「それってどついで…」

日向さんはフツツと笑いながら、
鞆から一枚の写真を取り出した。

「そ、それは…」

写っていたのは、灰原さんが
新一さんの腕にもたれかかっている姿。

「あなたが歩美ちゃんにそれを見せたんですね？」

「ええ、そうよ。昨日あなたと歩美さんが
話してるの全部聞かせて貰ったの。」

そこで、利用させて貰おうとひらめいたのよ
「

クスクスと楽しそうに笑う日向さんを見て、
僕はついに、我慢しきれなくなっていた。

「あなたは最低です！」

「あら、最低なのはあの女でしょ？
だって彼女がいる工藤新一が好きで、
こんなことしてるのよ？そう思わない？」

日向さんは表情一つ変えずに、
写真をひらひらと動かして見せ付けてくる。
僕は思わず声を荒げて、こう言い返した。

「人を騙すようなことするなんて最低です！
その写真だって隠し撮りじゃないですか！人の心を
傷つけて楽しいですか？どうしてそんなに灰原さんを

傷つけるんですか？確かに灰原さんは新一さんのことが好きですが、最低なんかじゃない！人を好きになることは悪いことじゃない、素敵なことです。あなたに灰原さんを貶されたくありません！傷つけるなら僕を傷つければ…っ！？」

「あら？どつしたの、円谷く…！」

日向さんの後ろには、あの人達が立っていた。

18 (後書き)

元太君の予想図をコナンツイッターに載せちゃいました(^^)下手ですが！

髪型はともかくそこそこイケメンに描いてみたつもりです！ふふっ！

にしても日向さんが悪女すぎてこの人がどうしてこうなったのか書くのが難しすぎます…あああ

もう少し軽い悪女にしとけば良かったなあ…失敗した

「今の話、聞かせてもらったぜ！」

「董さん、歩美を利用して哀ちゃんを…ひどい！」

そう、日向さんの後ろにいたのは元太君と歩美ちゃん。ハアハアと息を切らしながら、流れる汗を拭い、厳しい表情で日向さんを見つめる元太君。それを見て、日向さんは圧倒されたのか一歩後ろへと引いた。

「…わ、分かったわ。今回は私が悪かった」

日向さんはめんどくさそうにポリポリと頭をかきながらそう言ってくれた。

「分かれば良いんだ、灰原にも謝ってこいよ」

元太君は日向さんの肩をポンツと叩く。

「それは、嫌」

日向さんは元太君の手を払いのけて、顔を僕に向けて、今までの強気な態度からは想像できないような寂しげな、弱弱しい声で

「私はあなたのこと諦めないから…」

と呟いた後、日向さんは僕の目をまっすぐ見つめ、スタスタと足早にこの場から去って行った。

「ねえ光彦君、哀ちゃんは？」

「家の中にいますよ」

「歩美、哀ちゃんと話さなくちゃ…」

董さんのこと後で教えてね、光彦君」

そう言う歩美ちゃんは強い目をしていた。僕は後押しするように歩美ちゃんの背中をポンと前に押すように優しく叩いてあげた。

「行ってきます」

僕と元太君は歩美ちゃんに
ピースサインを見せた。
歩美ちゃんは優しく微笑んで、
家の中へと入って行った…

「日向さんは最低、か」

そんなの自分が痛いくらい分かっている。
けど、嫌がらせやいじめをしている時
解放された様に感じてスッキリした気分になる…

「円谷君…」

初めて好きになった人。
初めて欲しいと思った人。
例え、どんな手を使ってでも…

「ただいま」

「董、こんな時間まで何してたんだ」

「すみません、少し図書館へ」

「ふんっ、本なら私が買ってあげてるじゃないか」

「…以後気を付けます、お父様」

「蓮華はこんなことしなかったぞ…全く」

ズキンと痛む心。

まただ、またお父様は私とお姉さまを比べる。

やっぱりお父様は私を私として見てくれないんだ。

「もう、嫌…」

ポケットに入った、隠し撮り写真を見て

私はある一人の人物を思い出した。

「そうだわ、あの人に見せれば…」

私は思わず笑みが零れた。

大丈夫、今度こそ上手くいく。

今度こそ灰原哀を傷つけられる…

19 (後書き)

ちよつと色々と以前の
話を編集しました()

董さんの登場を入学式の
二週間後つて設定にしました

だからまあ歩美ちゃんが
哀ちゃん許せない!つて
なつてから今回まで
三週間くらいあつたつて
ことになりますーはい

「はい、アイスティー」

哀ちゃんはいつも通り、優しく微笑んで歩美にアイスティーとミルクを出してくれた。一口飲んでから、スカートをキュッと握って哀ちゃんの目を見つめた。

「哀ちゃん、ほっぺ叩いたりして、

あんなひどいこと言って…」

哀ちゃんの話も聞かずに、ゴメンね。

董さんに写真見せられて、ついカツとなっちゃって…本当にゴメンなさいっ!!」

そう言い終えたら、歩美は顔を下に向けた。

哀ちゃんの反応を見るのが怖かった…

「謝るのは私の方よ、吉田さん」

哀ちゃんのその言葉に、顔を上げると
目に涙が溜まっているように見えた。

「工藤君が好きなの…本当だから」

その時の哀ちゃんの表情は、
今にでも泣き出しそうなくらい
悲しくて、切なくて、苦しそうだった。

「ゴメンなさい、吉田さんにはずっと
真実を隠してたのに…本当に最低ね、私」

最低。

その言葉を聞いて、光彦君が
董さんに言っていたことを思い出した。

「灰原さんは新一さんのことが好きですが、
最低じゃない！人を好きになることは
悪いことじゃない、素敵なことです！」

「え？」

「光彦君が日向さんにそう怒鳴ってたの！
あんなに怒ってる光彦君、歩美初めて見たよ」

「円谷君が…そう」

哀ちゃんは笑ってたけど…苦笑い？

歩美いけないこと言っちゃったかな？

とりあえず話を少し変えてみる。

「歩美、新一さんのこと好きになっちゃダメ！

っでずつと言いつ聞かせてきたんだあ…けど、

そんなんじゃ好きって気持ち消えてくれないよね」

「吉田さん…」

「哀ちゃんもそうだったんだよね？」

コナン君がいなくなってからもうすぐ10年。

つまり、新一さんが帰って来てから

もうすぐ10年だということ。

蘭さんと一緒にいる新一さんを見て、

哀ちゃんはどれくらい苦しかったのかな？

いつつも新一さんと蘭さんの傍にいたんだもん。

相変わらず熱いわね、って冷やかしたり

二人が喧嘩したら愚痴を聞いてあげたりしてた。

哀ちゃんはずっと、あの二人を支えてきたんだ…

「ゴメンなさい、吉田さん…」

何で、何で歩美は哀ちゃんの気持ちを
ちゃんと考えてあげられなかったんだろう。
何で怒ったりしたんだろう、何で一緒に…

「…哀ちゃん、謝らないでよ」

一緒に話して、一緒に泣けば良かったんだ。
真実を聞かされたあの日に、もっと素直に
なれていたら…ううん、まだ遅く無いよね。

「吉田さん、泣かないで笑ってちょうだい」

だって、今の哀ちゃんは心から笑ってるから…

「うんっ！」

歩美は涙を指で拭って、ニッコリ笑った。

20 (後書き)

あっさりしすぎとか
言わないで下さいね

ここはメインじゃないので
あっさり解決いたします

じゃあメインは？

…それは追いついて、ね

「そうか、灰原がそんな目に…」

僕は元太君に日向さんのことを話した。
僕に好意を寄せていること、灰原さんを
目の敵にして嫌がらせをしていること、
園子さんから聞いた話も話した。

「僕、日向さんと一度真剣に話してみます」

「光彦…」

「決めたんです、灰原さんを守るって」

歩美ちゃんには何もしてあげられなかった
こんな非力な僕だけど、灰原さんは…

「あ、出てきたぜ！」

元太君はニカツと歯を出して笑いながら、
歩美ちゃんと灰原さんに手を振る。

二人は顔を見合わせて笑った後、僕達の方へ歩み寄ってきた。良かった…仲直りしたんだ。

「光彦君、ありがとう」

「へ？」

「歩美、ちゃんと仲直りできたよ！」

「僕は何もしてないじゃないですか。

それに、僕は小1の時からずっと真実を知ってたのに隠し続けたきたんです…」

歩美ちゃんは、ブンブンと首を左右に振って、僕の手を包みこむように優しく握った。

「光彦君、こうしてくれたでしょ？」

歩美ね…あの時凄く落ち着いたんだ。

もう良いの、本当に本当にありがとう」

歩美ちゃんの優しく可愛らしい笑顔に僕はついドキドキしてしまった。

「けど、一番お礼しなきゃいけないのは元太君だね！」

「べ、別に良いよ」

そうぶつきらぼつに言う元太君の頬が見る見るうちに赤く染まっっていく。

「じゃあ、また遊びに来るね哀ちゃん」

「ええ、いつでもいらっしやい」

灰原さんは嬉しそうに微笑んで、手を振る。歩美ちゃんも嬉しそうに笑って手を振る。ああ、本当に良かったと改めてそう感じた。

「…円谷君」

歩美ちゃんと元太君が見えなくなっただけから、灰原さんは俯いて、小さな声そう呟いた。

「はい？」

灰原さんは拳をギュッと握り、勢い良く顔をあげて僕の目を見つめた。

「貴方、私が工藤君のこと
好きだっていつから知ってたの？」

「…え？」

一瞬、灰原さんの言っている意味が
分からなかったが僕はすぐにきつと
歩美ちゃんが日向さんに言った言葉を
教えたんだろうと察した。

「いつから…そうですねえ」

いつから、なんて分かってる。
灰原さんと二人っきりの教室、
今でもあの時の場面がはつきりと蘇る。
けど、それを口にしたくは無かった。
僕の心の中には灰原さんが新一さんを
好きだという事実を認めたくない！
というそんな気持ちがあったのだ。
まあ、今さっき灰原さんの口から
その事実を聞いてしまったのだけど。

「覚えてますか？小1の時、灰原さんが
放課後の教室に一人でいた時のことを…」

僕は穏やかな口調で、作り笑いを浮かべ
そうあの時の話を切り出した。

「あの時、僕は灰原さんの気持ちに気づきました。
だから決めたんです、ずっと貴女を支えていくって……」

灰原さんの顔が一気に赤くなる。
どうしてだろう……僕なんか変なこと言ったかな？

「灰原さん？」

俯いてる灰原さんの顔を覗きこむと、
更に顔が赤くなり、目をギュッと瞑る。

「……どうして、貴方はそんなに優しいのよ」

21 (後書き)

小1エピソードは短編読んで

下さいねーそもそもこの連載は

一応続編という形なので(^^)(

今でも忘れない。

江戸川君がいなくなってから、
吉田さんと小嶋君に彼の居場所を
聞かれるのが嫌で、彼らを避けて、
一人でしばらく過ごしていた…

家に帰るのも嫌になって放課後の
教室から窓の外を眺めていた。

どこか遠くに行けたら…なんて思いながら。

そんな時に円谷君が話しかけてきた。

彼は江戸川君と工藤君が同一人物だと
見破り、私に真相を確かめにきたのだ。

『もう、ごまかしても無駄です』

そう言った彼の顔を今でも覚えている。

真剣で勝ち気で、自信満々で…そう、
まるで江戸川君の様だった。

そして、私が教室から逃げようとした時、
彼は私をこう呼び止めたのだ。

『ま、待って下さい！
帰る場所が無い、その言葉の
意味は僕には分かりません…
ですが灰原さんの居場所があります！
僕達はずっと灰原さんの仲間です！
だから、だから僕達を避けないで下さい！』

私は彼の言葉に涙を流した。
温かくて、まっすぐで、私には
もったいないくらいの言葉だった。

「灰原さん？」

そう、私はあの日からずっと
円谷君に支えてもらってきたんだ。
どんな時もいつも傍にいてくれた…

「私…」

私はいつでも自分のことばかり考えていた。
工藤君のことだって、傍にいられるなら
今の関係で充分だって思ってたけど、
蘭さんは一体どう思っていただろうか。
吉田さんは優しい言葉をくれて許してくれたけど、
彼女の心を傷つけてしまったのには変わりはない。

それに…

「円谷君のこと…今までどれだけ傷つけてきた？」

「え…？」

一瞬、彼の目が泳いだ。

「…僕は傷ついてなんかいませんよ。

僕の方こそ灰原さんを傷つけたりしませんでしたか？」

自分の弱さは見せない所、

自分より他人を優先して考える所、

円谷君はやっぱり彼に似てる…

「そんなこと無いわ、あなたには

感謝してもしきれないのよ？本当に…」

円谷君は嬉しそうに微笑んだ。

そして私は、その笑顔を見て鼓動が高鳴った。

「ずるいわね…」

いつからこんなに大人になったんだろう。
いつからこんなに頼れる存在になったんだろう…

「灰原さん？」

「あ、ええつと…何でも無いわ」

「そうですか、それでは僕はそろそろ…」

気がつけば赤く染まる空。

少し肌寒くなってきた気候。

今日一日で色々あったわね…

「円谷君、ありがとう。日向さんに色々

言ってくれたみたいで…本当にありがとうね」

「いえ、僕は何も…」

「良かったらお礼するわ、何が良い？」

そう言うと彼は言葉を詰まらせて、

少し頬を赤く染めながらクスッと微笑む。

何を想像してるのかしら…？

「や、やっぱりお礼は良いです」

「そう…じゃあ今度どこか行かない？」

「え？」

自分でもビックリした。

自然に口から言葉が出てきたのだ。

「それって、デートですか!？」

顔を真っ赤にして、いつもより大きな声でそう聞き返す円谷君。

「ええ、そうね…そうゆうことになるわね」

また嬉しそうに微笑む円谷君。

どうして相手が私なのにそんなに嬉しそうなの？

吉田さんならともかく…

「じゃあ、また明日！お出かけ、楽しみにしてます！」

「ええ、また明日…」

デートとは言わず、お出かけと言つ円谷君が
何だか可愛くて思わず私も笑つてしまつ。

「デート、ねえ……ふふ」

「え、今日も日向さん学校に来てないんですか？」

灰原さんと歩美ちゃんが仲直りしたあの日から
もう一週間経ってしまった。日向さんの連絡先や
家知らない僕は、あれから何も話せずにいるのだ…

「どづしよづ…」

日向さんが学校に来ないことで、灰原さんへの
嫌がらせはもちろん収まる訳だし、平和にはなるが
それじゃあ何にも解決していない。

「どづしたの？」

「え、あ、その」

教室の机に顔を伏せていた僕の肩を
ポンツと優しく、笑顔で叩く灰原さん。

歩美ちゃんと仲直りしてから、表情が
今まで以上に明るくなったように感じる。

「日向さんのことかしら？」

「はい、あれから学校に来てないんです」

いくら灰原さんを侮辱したからとはいえ、
僕は彼女に最低な人だと言ってしまった。
彼女の苦しみを理解すべきだったのに、
僕が彼女を更に苦しめてしまったんだ…

「僕、日向さんの過去の話を聞いて

彼女は悪い人じゃないって感じました。

もちろん灰原さんにしたことは許されませんが」

「円谷君は日向さんを救いたいよね？」

灰原さんの言葉に僕は大きく頷いた。

「貴方は誰にでも優しいのね…」

「え？」

トゲのある言い方、悲しげな笑顔。
灰原さんは自分の席へと戻っていった…

「ふう…」

体調が悪いとごまかし続け早一週間。

そろそろ行かなくては、と仕方なく制服を着て
学校へ来たが教室に行くつもりは無い。

コンッコンッ

「はい」

明るく優しい返事が返ってきてから、
私はゆっくりとドアを開けた。

ガラッ…

「あら、日向さん。どうしたの？授業は？」

「今日は、毛利先生にお話があつて来ました」

そう、向かった先は保健室。

好都合なことに毛利先生しかいなかった。

「話？」

私はボイスレコーダーと例の写真を

鞆から取り出して、毛利先生の机に置く。

もちろん写真は裏返しで。

「とりあえず聞いて下さい」

まずはボイスレコーダーの再生ボタンを押す。

『哀ちゃんと二人でゆっくり話そうと思って、

この前哀ちゃん家行ったんだ…そしたらね

哀ちゃん楽しそうに新一さんと家の前で話してて』

『灰原さんが？』

『哀ちゃん、新一さんのこと好きなんだなって

見てて思ったの。けど、それはダメなんだよ？
だって、新一さんには蘭さんがいるんだよ？
歩美は、コナン君と新一さんが同一人物って
分かって…けど、新一さんを好きて思っちゃ
ダメだってちゃんと言い聞かせて、我慢したのに！」

ピッ

「歩美ちゃんと光彦君…？」

「ええ、申し訳無いけど盗み聞きさせて貰ったの。
けどね、これは毛利先生のためなのよ？だって、ほら」

私が裏返しにした写真を指さすと、
毛利先生は躊躇しながらもゆっくりと
写真を表に返した。

「じ、これ…！」

毛利先生の額から流れる汗、
顔色がどんどん悪くなっていく…

「私は先生の味方だから、ね？」

私はとびつきりの笑顔を見せて、保健室を後にした。

23 (後書き)

ちょっと話が進みましたね！

哀ちゃんの心情の変化はこれから
ちよっとさかのぼったりして
書いていきたいですねーはいはい

こっから新一君も出てくるでしょー

キーンコーンカーンコーン…

「ふう、疲れたあ」

授業も全て終わり、僕は帰り支度をした。

昼休みから灰原さんの棘のある言葉が頭に残ったまま。

別に棘のある言葉が珍しい訳でも無いが、妙にひっかかった。

「誰にでも、優しい…か」

言われてみれば、僕は灰原さんも歩美ちゃんも

日向さんも自分が助けてあげなきゃ、なんて

変な使命感に縛られていたような気がする。

誰にでも良い顔をしていた、とも言い変えられる。

いわゆる八方美人？そんなつもりは無かったが、

僕のそんな姿にきつと灰原さんは呆れたのかもしれない。

「円谷君、もう帰るの？」

そんなことを考えていたら、灰原さんが話しかけてくれた。さっきの灰原さんを感じさせない穏やかな笑顔を浮かべて…

「はい、特に用事ありませんので」

「そう、じゃあ一緒に帰りましょう？」

「…はいっ！」

僕は笑顔でそう答え、鞆を肩にかけた。

「…こんなの、何かの間違いに決まってる」

日向さんが置いていった一枚の写真と光彦君と歩美ちゃんの会話が録音されたボイスレコーダー。とりあえず写真を手に取ってまじまじと見てみるが、別に写真からロマンチックな雰囲気やいちゃいちゃしてる雰囲気を感じられない。だから、この写真は間違いなんだと何度も

頭の中で唱えて、何度もそう言い聞かせた。

「毛利先生の…味方か」

日向さんは何者なんだろう。

日向グループのお嬢様だつてことは知ってるけど…そもそも歩美ちゃんと光彦君の会話を盗聴するなんて普通はしない。そもそもこれって立派な犯罪だよな？

「どっしりよっ…」

新一に相談しよう、って気にはなれなかった。歩美ちゃんと光彦君の会話の内容をどうしても新一の耳に入れたくなかった。だって、哀ちゃんが新一のこと好きじゃないって私は言いきれないもん…けど、一人で抱え込むのも正直辛いものがある。

「園子に相談してみようかなあ…」

園子なら的確なアドバイスをくれそうだし、それに同じお嬢様なら何か知ってるかもしれない。今日の夜にでも電話してみようかなあ…

ガラッ

「毛利先生、職員会議始まりますよ」

「あ、すみません！すぐに行きますね！」

私は新一と哀ちゃんが写った写真と、
ボイスレコーダーを鞆にしまい、保健室を跡にした。

24 (後書き)

お久しぶりの更新ですね！

つて大して話進んでねえww
いや、これからなんですよ！

次の更新いつになるかなあ…
来週はテスト地獄で死にそう

BGM: Misty Mystery (CD通常版買った！)

「今日も疲れましたね、灰原さん」

いつもと同じ帰り道、のほろほろだけど…
いつもより何だか息苦しい気がする。

「灰原さん、大丈夫ですか？」

円谷君は本当に優しい人。
今まで私のことを支えてくれて、
それは感謝してもきれない。

「ええ、大丈夫よ」

困ってる人や苦しんでる人を
ほっとけない人だっけ分かってる。
けど、それでも日向さんを救いたいという
彼の真剣な眼差しを見た時心が痛んだ。

「そういえば、おととい歩美ちゃんと会ったんですね？何を話したんですか？」

「え…っと、内緒よ内緒」

「え〜気になります」

円谷君に言える訳がない。
だって、一昨日は…

「哀ちゃん！」

遠くから笑顔で、手を振りながらニコニコしながら駆け寄ってくる吉田さんを見て、思わず笑みが零れた。

「待たせちゃってごめんね！」

今日は、日向さんについて話すために吉田さんとカフェに行くことになった。円谷君が吉田さんに説明はしたのだが、

吉田さんは私からも話を聞きたい！と
そう言ってきたのだ。断る理由なんて無いし、
話せばスッキリするだろうと快く承諾した。

「いらっしやいませ」

初めて来た駅前のお洒落なカフェ。

吉田さんはこつゆう場に慣れていないのか
唾をゴクリと飲み込んでいた。

「そんなに緊張しないで頂戴、ほら座って」

「う、うん」

「私はアイスコーヒーで。吉田さんは？」

「ピーチティーで！」

「はい、かしこまりました」

店員さんはニコッと笑い、ペコッと
一礼した後スタスタと歩いて行った。

「凄く綺麗で大人なお店だね、哀ちゃん」

少し固い笑顔を浮かべる吉田さんに
私は優しく微笑んで、ナプキンを渡す。

「お待たせしました、アイスコーヒーと
ピーチティーです。ご注文は以上で…」

「ええ、大丈夫です」

「はい、かしこまりました。失礼致します」

吉田さんはすぐにピーチティーを一口飲んで、
ふう〜と大きく息を吐き出した。

「じゃあ、聞かせて貰って良いかな？」

「ええ、分かったわ」

私は、日向さんが円谷君のことを好きなこと、
日向さんにされた嫌がらせ、言われた言葉、
包み隠さず全てを吉田さんに説明した。

「…哀ちゃん、辛かったね」

「いいえ、日向さんのことはそうでも無かったわ」

「え？」

吉田さんは私の言葉にきょとんとして、首を傾げた。

「私は貴女ともう仲良くできないんじゃないかって、
そっちの方がずっとずっと辛かったし、怖かったの」

「哀…ちゃん」

自分でもこんなことを口にするなんて…
おかしいわね、歳月を経ると共に感情を
表に出しやすくなったような気がする。

「ねえ、哀ちゃん」

「何かしら？」

吉田さんは私の目をジッと見つめる。
ああ、彼女もこんな目をするように
なったんだなあ…なんて思いながら、
私も吉田さんの目をジッと見つめた。

「哀ちゃん、は、光彦君の……」

25 (後書き)

お久しぶりです (*..*)

テストが終わり秋休み期間に入ったので執筆再開できます！

お待たせしました！

話展開していきますので

どうか長い目で見てやって下さい！

「どう思う？」

円谷君は、小1の頃からずっと一緒にいた友達、仲間…ううん、それだけじゃないような気がする。

「円谷君、ね」

ふと、あの二人っきりの教室の場面が頭に浮かんで胸が熱くなってしまう。

「うん、哀ちゃんが光彦君のことどう思ってるか知りたい」

何故か上手い言葉が見つからず

私はそのまま黙り込んでしまった。

それに、私はずっと円谷君が吉田さんのことを好きなんだって確信していたから何だか複雑で、吉田さんの目を見れなかった。

「吉田さんは、どう思ってるの？」

「歩美？歩美は、光彦君と幼稚園の時からずっと仲良くしてきたんだ。光彦君は、歩美にとって大切な友達で、仲間だよ！」

そう、私も吉田さんみたいにそう言えれば良いのに…何でこんなにモヤモヤするの？私にとって、円谷君の存在って一体何なの？

「…あ！もうこんな時間！歩美買い物頼まれてたんだ！」

「そう、じゃあ出ましようか」

私達はすぐに会計を済ませ、店を出た。正直、ホツとした。多分あの場でいくら考えても答えは出なかつただろうから。

「じゃあね、哀ちゃん！」

「ええ、またね…」

「灰原さん？」

ハッと気づくと、円谷君が私の顔を心配そうに覗きこんでいた。ちよつと顔を前に出せば、ぶつかり息が当たってしまうようなそんな近さ。

「あ、ゴメンなさい！」

私は赤くなっている顔を隠すため、ブイツと彼から顔ごと逸らした。

「僕こそすいません、除きこんで……」

チラッと見ると、赤く染まる円谷君の頬。ポリポリと照れくさそうに頭をかく、そんな彼の動作にドキドキと胸が高鳴る。

「別に怒ってる訳じゃないのよ、ただ……」

「ただ？」

「恥ずかしかっただけ」

ポツリとそう呟くと更に彼の頬は赤くなっていた。そんな反応をされたら、こっちも頬が熱くなる。

「僕も、恥ずかしかったです」

真っ赤な顔で、私の目を真っ直ぐ見つめて照れくさそうにニカツと歯を出して笑う。

「お互い様ね」

私は冷静を装って、そう返した。

「はい、そうですね」

日向さんが円谷君のことを好きになつた理由が今ならちゃんと分かる。

「止まってすいません、歩きましょうか」

円谷君ははいつも背中をピンと伸ばして、
真っ直ぐ歩いていて、そんな彼の姿は、
キラキラと眩しくて、本当にカッコいいと思う。

「ええ、そうね」

そんな彼と一緒にいる私も、彼みたいになれるんじゃないかなんて、そんな風に自惚れて、自分が黒いことなんてすっかり忘れてた。
……だから、バチが当たったのね。

「灰原さん、まだ顔赤いですよ？」

「き、気のせいよ」

「アハハ、冗談ですよ！」

このキラキラと眩しい笑顔が、
私の前から消えてしまうなんて
この時の私は思ってもみなかった
…

26 (後書き)

久しぶりに投稿しましたー

スランプってやつです！

本当読みにくくてすいません>>

ここから蘭ちゃん視点で話を

進めていきますー頑張るぞ！

新一が私のことをどれだけ想ってくれて、
どれだけ大切にしてくれているのは、
ちゃんと分かっている、本当に感謝してる。
私は、新一のことを心から信じてる。

「毛利先生、お疲れ様でした」

「お疲れ様でした！」

職員会議が終わり、配られた書類を
鞆にしまおうとチャックを開けると、
すぐに目に飛び込む哀ちゃんと新一の写真。
こんな写真一枚でこんなに心が揺らぐなんて…

「帰ろう」

よいしょと持った鞆がいつもより
ずっと重くて、私はキュッと唇を噛んだ。

「まだ夜は冷え込むなあ……」

今日は朝から暖かったから、油断していつも持ってきていたカーディガンを家に忘れてしまった。職員会議の後に、保健室の備品整理をしていて、帰りが遅くなったため、いつもより寒く感じた。そんな中、私が肩を震わせながら、とぼとぼと歩いていた…その時だった。

「蘭！」

「…え？」

その声に振り返ると、少し遠くからハアハアと息を切らしながら走ってくる新一が目に見えび込んできた。

「あ！」

新一の手には、私が忘れたカーディガン。
ああ、わざわざ仕事終わりに届けてくれたんだ
と想うと嬉しくて、何だか安心して、
私の目からはポロポロと涙が零れてきた。

「お前忘れただろ」って、しょうがねえから
届けに来た…って蘭！？何泣いてんだ？どうした？」

涙で新一の顔がぼやける。
けど、例えばやけていても、
新一が心配そうに私を見つめてくれてる
ってことはちゃんと分かった。

「ゴメンね、何でも無いの…ゴメンね」

どうしても、写真のことは言い出せなかった。
新一はきつと哀ちゃんの気持ちに気づいていない。
ずるいかもしれないけど、私の口から哀ちゃんの
気持ちを教えたくは無かった。それなら、哀ちゃんの
口からちゃんと聞いてくれた方がずっと良い。

「蘭…」

新一は何も言わずに、私の肩にカーディガンをかけ、

優しく抱きしめてくれた。そして、指で私の涙を拭い震える私の唇にそっとキスをしてくれた。

「…まあ、とりあえず帰るか」

新一はそう言って、頬を赤らめながら、私の手をそっと優しく引いてくれた。新一の手の温かさが心地よくて、この時、私は改めてこれからもずっと、新一の傍にいたいなあと思えた。

「ありがとう、新一…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8177u/>

貴女の幸せ

2011年10月9日00時47分発行